5/12/2011

2ヶ月目の大震災ボランティア参加

北村社会福祉士事務所
代表　北村　弘之

今回、神奈川災害ボランティアネットワーク(KSV)主催の「宮城県内夜行日帰りボランティアバス」に参加してきました。　http://ksvn.jp/category/news

ボランテイア当日はきしくも 3.11 の 2 ヶ月目。ボランテイア先の住民と一緒に防災無線の呼びかけに応じ 14 時 46 分黙祷の機会がありました。

【災害ボランティア活動・・・・】

私は、被災地外の人は募金や寄付活動といった経済的側面で支援しており、これも大変大切な行為で継続していく必要があると思っていましたが、何かまだ不足して部分があるのではないかと思っていた矢先、このボランティアネットワークの存在を新聞で知り、「力仕事」を通してのボランテイア活動に参加しました。今回のメンバー30 名のほとんどはやはり何か被災地の地元で協力したいとういう人が多くいました。また、実際に自分の目でその被災地の状況を見、首都圏で被災した際の対応方法等を肌で感ずることが大切と考えて参加しました。

【宮城県内夜行日帰りボランティアバス】

今回、KSV 主催のボランテイアバス応募は4月下旬にあり、2日間で計 8 回(30 名/回)の応募があり、申し込みはすぐ打ち切りとなったようです。今回のボランテイアは、一輪車(4 台)、スコップ(20 ケ)、土嚢袋(1000)、水(ポリタンク 8 ケ)等をバスに積み込み、横浜を 19:30 に出発し、途中車内で仮眠をとり翌朝現地入りし、15:30 頃まで力仕事をし、その夜 23 時に横浜に帰るという強行軍のバス貸切で、飲食やバス代は全て参加者がまかなうというものです。それでもバス代は 6,000 円。飲食代や保険、現地のお土産代(地域貢献)などで 1 万円ほどでした。 参加数日前の事前説明会(夜 1.5h)の出席は必須で、当日の仕事内容や装備、準備物等の話がありましたが、「現地に行ってみなければ、どのような作業になるかわからない、またトイレや水もわからないので各自持参」との説明に、参加者は大丈夫かなぁという雰囲気。実際今回の訪問先 2 軒のうち 1 軒は、水は出ましたがトイレは使えず、200m 離れたもう一軒のボランティア宅にトイレを借りました。

事前説明会当日の話ではボランティア先は宮城県山元町でしたが、参加2日前には隣町の亘理町(わたりちょう)に変更がありました。これも、宮城県の災害ボランティアと連絡しており、刻々と状況が変わることの対応によるもので、やはり現地に行かないとわからないのもうなずけました。2回目以降、山元町、東松島市と続きます。 今回、30 名の一般参加者と 3 名のコーディネーター(阪神淡路や中越を経験した人)と運転手2名。出発は第一陣とあってメディア各社のインタビューもあり、当日夜の NHK で出発状況が放送されたようです。

参加者の顔ぶれは、夫婦の人、定年後の人、有休をとり参加したサラリーマンとまちまちですが、「何かしたい」という人であふれていました。そのうち女性は8名でしたが、男女の隔たりなく力仕事に汗を流していました。

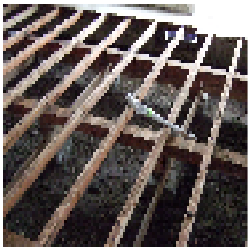
今回の 8 回にわたる計画は6月初めまでですが、今後被災地のボランテイアセンターと連携しながら、力仕事から心のケア、相談と支援内容が変わっていくようで、数年にわたる計画になるとのことです。

【宮城県　亘理町(わたり)と被災状況】

亘理町は、宮城県の太平洋海岸南部沿いにあり、阿武隈川の河口で津波被災したところです。(仙台空港の南約 10Km 南の平地）。

現地の災害ボランティアセンター(右写真)で手続きと訪問先を確認し、乗ってきたバスで移動。堤防代わりになった常磐自動車道路のトンネルを通過して山側から海側に入ると一面、田んぼと思われるところには車や漂流してきたものが散乱。津波の跡です。津波の高さは人間の背丈ほど。その駐車場の吉田支所から徒歩で現場に移動。 常磐線「浜吉田駅」の近くです。

我々A 班17名は担当宅に到着。ご主人が迎えてくれ、依頼作業内容をコーディネーターに説明後



作業に着手。写真にあるように、海水に浸った床下の泥や家屋の周りの泥を外に運ぶ作業です。

写真左側の B 班宅では、バールで床を剥がし、その下にある泥をスコップで外運び、土嚢に詰め込みました。また、右側の写真は A 班宅の庭の泥を取り終えたもので、床下と宅地内から約 1000 ケの土嚢を作り運びだしました。ご主人の話では、この2か月間一人で、津波で押し寄せてきた物の撤去、そして自宅の家財の撤去などを行い、最後に「泥だし」をボランティアに依頼したようです。もちろん家の中は空っぽ状態で、先祖の写真が梁に飾って残っているのが印象的でした。

「よくも、これだけ一人でやりましたね」とご主人に声をかけたら、「何かしないと前進しないものね」と話されていました。 たくましい精神力、生きる力に驚いた次第です。

午前中、メンバー同士はお互いの知らない中、簡単な作業・手順をコーディネータから聞き、手探り状態。とにかく声かけと勝手にやらないことを合言葉に作業。 昼食時にいろいろとご主人から話を聞けたのと、ご主人の体力と声掛けに引っ張られ、午後は急ピッチで作業が進み、終わらないと思って着手したものの、黙とうの時間にほぼ終わり、その後涙雨の状況になったのは偶然なのでしょうか。

ご主人は、大震災の 5 日前に横浜のランドマークに遊びに来られたということで、偶然にボランテイアに来ている人の多くは横浜と言ったらビックリしていました。やはり何か縁を感じました。

一軒ごとの片づけは住民が行うことになっており、日々の生活を過ごす中、住む自宅の片づけには機械を導入することもできず、まさに人かい戦術しかなく、今後も多くのボランテイアの必要性を感じました。作業している最中に近所のおばあさんが来られ、「うちも依頼しているが、いつになるのかなぁ・・・」と言われていました。2か月経っても、泥が溜まった状態で住めないようです。

info@kitawel.com
HK Welfare

右下の写真は、B 班担当の自宅前での昼休み風景です。一見すると被災にあった家とは思えませんが、中は泥だらけ。 現在避難して暮らしています。ただ改築して住むようにしたいとの一念です。 台所や洗面所、居間等の泥を出し、庭に石灰をまきましたが、住むには見積もりをとり、業者に工事の依頼等で半年先か1年先になるかわからないとのです。

ここでの被災(海岸から2km)の多くは地震によるものでなく、「津波」によるものなのです。 朝方に東北自動車道の白石 IC 降りたあと、車窓から外を覗き込みますが殆どの家は崩れることなく、瓦屋根の一部が破損を受けブルーシートをかけてある家が見えました。この光景はボランティア先の海岸寄りの土地でも同様でした。建物はしっかりしていても、津波に負けたようです。

左下の写真は、「赤旗」印の家。これは家屋もがれきも一緒に行政に撤去してもらいたい意思の家です。(中央部分に赤い旗)。 ガレキの撤去をお願いして、今後も住みたい意思の家庭では「黄旗」。

「緑旗」は家屋もガレキも全て残すというものでした。

街中を走る車の殆どは撤去物を運ぶダンプや役場、ボランティアの関係のものです。道路脇には、各家庭から出された廃棄物やガレキが山のようにあり、ショベルカーとダンプで撤去作業していました。

【ボランティア参加者】

今回参加者 30 名。「金銭でなく、何かやりたい」という思いで参加した人が多かったようです。帰りのバスでは、一人ひとりがコメントを発表する時間がありました。 定年後の男性は、夫婦で参加することにしたが、まずは先遣でご主人が参加したとの話に笑いがこぼれました。また、息子様とお父様が全 8 回のうち2回ずつ交互に参加されるというお父様の発表。第何回目も参加すると言われていた人も数名。 とにかく、家にいるより何かできないかと正義感漂う様子が感じられました。

【参加して】

バスで隣り合わせた人は、以前私が働いていた会社の親企業(SK 社)の元従業員。仕事柄や知り合いもいたことにビックリ。但し、私とは1歳違いで現在仕事探し人。 大のゴルフ好きでどうもシングルの持ち主。それはよいとして、この自分が震災復興に向けて何かやることがあるだろうと思い参加されたようです。

若い人、中年の人、女性と様々な参加者でしたが、新聞等で言っているようにボランテイアに参加する姿勢が「時代」の風で変わってきているように思えました。 経済第一はもちろん大事ですが、社会を築いている人々の「共助」つまり助け合いの精神が一層目覚めてきている感がしました。それは現実の政治に頼ることなく自分達でやっていく必要性を感じているのかも知れません。そのような考えも、今後の企業のあり方にも影響を与えそうです。 今年の夏旅行は北東北復興の旅を予定しています。

以上

info@kitawel.com
HK Welfare